

時空の漂泊

(一〇〇五年三月二十二日 第八号)

高橋 滋

広島便り——山中の小屋造り

これから始まる物語は、広島市の住人（五九歳）の私が隣の廿日市市佐伯の山中に小屋を建て上げるまでのお話である。それを毎月一回、十回ほど書くことを予定している。ただそれだけのことだが、忙中の一服の清涼剤にでもなれば幸いである。

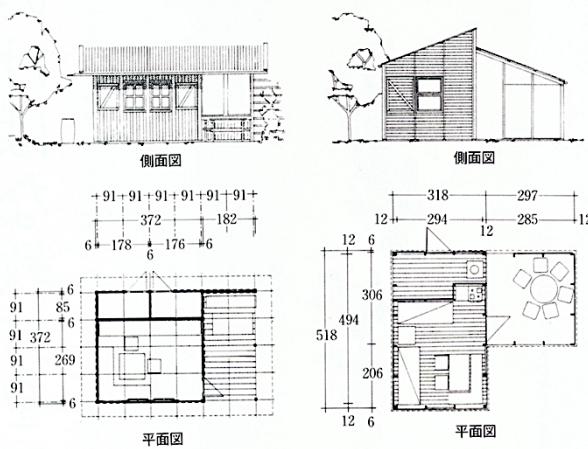
建てるのは、週末農園などのための作業小屋である。日本のいわゆる「市民農園」の手本となつたドイツの「クラインガルテン」(Kleingarten: 小さな庭)にある「ラウベ」(Laube..小屋)のようなものである。

建てるのは、週末農園などのための作業小屋である。日本のいわゆる「市民農園」の手本となつたドイツの「クラインガルテン」(Kleingarten: 小さな庭)にある「ラウベ」(Laube..小屋)

住むことは考えてない。野菜や花の栽培、間伐材の加工、家具製作などの木工の拠点とするつもりである。自分で密かに「老後のプレイグラウンド」と呼んでいる。いつまで使えるのか分からぬが、仕事を辞めた後の時間を消費する場所と設備を今のうちに準備しようというものである。

佐伯には江戸時代の津和野へつな

る。
廿日市市は広島市の西側に隣接し、佐伯は西に長く延びて山口県に接す



家庭農園に建てる小屋は、自分の手でつくるものから、やや上等の図のような既製のものもあります。左の方はシンプルなタイプ、右の方はやや整ったタイプです。基本的にコンパクトで独立しています。



がる街道があり、その跡が残つてゐる。町を流れる一級河川、小瀬川は上流にまとまつた集落がないため水は清冽である。水量も豊富である。なだらかな周辺の山は昭和の中頃まで多くの山の富を里の民に供給していた。

広島では、有力な事業家は、官製

の広島市内ではなく、その周辺の町

に育つた。玖島くじまにある八田家は、資

産は一県に値するといわれ、醸造な

どをしながら、広島の金融組織の母

体を作つた。ゴルフで有名なウッド

ワンも、佐伯さいきと同じ時期に廿日市はつかいちに

編入した隣村、吉和の山林事業から

スタートした全国区企業である。

(観光案内 <http://www.saiki-navi.jp/kanko/>)

佐伯さいきは広島県の中山間部としては

比較的広い平坦地を持ち、人口は一万三千人程度。世帯の八五%は農家で、都会へ通勤する人も多いが、たたずまいは農村地帯である。広島市から入るときは急坂を登つて峠を越える。すると平坦地になる。その高度はおよそ三百メートルである。気温は市内より二～三度（冬は四～五度）低い。

先に「住まない」と言つたが、ここに到るまでの道の起點は「別荘が欲しい」という二十年來の想いで、そのため広島県や島根県の物件を数多く見てきた。

しかし、もはやここに住宅を建てることはない。購入した広島市の市街のマンションを住みかにしながら、ここで仮想の「田舎暮らし」をするという構想を実現するつもりである。

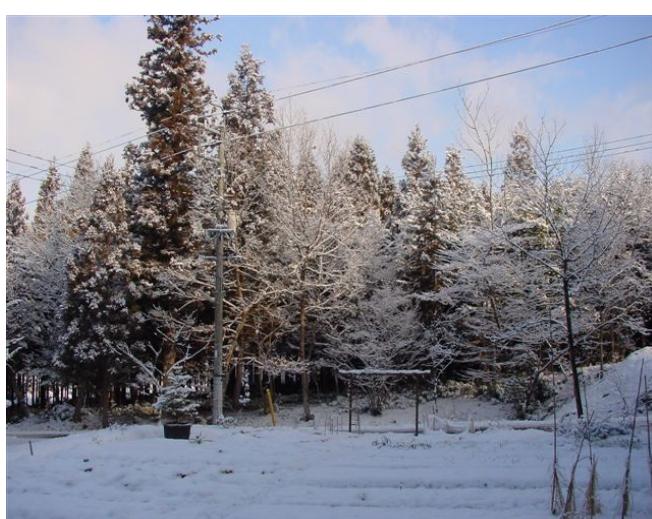
「別荘」と「田舎暮らし」は私の中ではほとんど同義だつたようだ。子供のころ世田谷区に住んでおり、夏休みになると近所の友だちが「田舎に帰る」というのを非常にうらやましく思つた。朝早く起きると青白いセミがいるに遊ぶ時間もそう長くはない。しかし、なんだといった自慢話を、遠い世界の話のように聞いていた。振り返ると、サ

ラリーマン時代の私の「別荘」を持ちたいという願いは、「田舎が欲しい」という幼児期の想いが形を変えただけのように思われてならない。

別荘探しには、裁判所の競売システ

ムを利用した。広島でも何回か不動産ブームがあり、その後遺症で、入居の進まない別荘向けの山林開発地やミニ住宅団地の競売が毎月公示される（地元地方紙に一面を使つた広告が出来る）。

津田の物件は百～二百坪、自宅から二五キロメートル程度という条件にぎりぎりマッチしていた。敷地の半分を花と野菜に充てて、残りを作業小屋とウッドワークの作業スペースにすれば、何とか週末ライフが成立するよ



うに思われた。周辺は林で落ち着いており、傾斜は少なく、近くには小川も流れている。津田の役場まで一キロメートルであり、これも悪くない。八八万円の最低入札価格の一割アップで入札して落札した。

ブルが弾けた後でも競売の査定（鑑定）価格はしばらく高止まりしていたおり、当が付いていた時期があつた。土地バブルが、入札不調後の再鑑定価格が一気に下がるようになつた。ちなみに二回の再査定で元値の一割近くに下がつた物件もあつた。

この土地でも二千万円以上の根抵帳価格とは大きな開きがあつた。落札した物件の固定資産税台帳価格は「入札額程度の価値だろう」と思つていたところ、町役場で閲覧した固定所資産税台帳価格は、その四倍以上だつた。「購入価で税金を払わせて欲しい」と交渉したが駄目だつた。不動産取得税も台帳価格があり、これは予想外の出費になつてしまつた。

ところで、私が土地を探すときに距離に関して付けた「二十五キロメートル

ル以内」という条件にはついては、それなりの理由があつた。以前、広島市の東、四十キロメートルほど離れた東広島市に以前すんでいたことがあるが、現在住んでいる広島市の市街のマンションから、そこにまで出掛けてあれこれ作業すると、本当に一日仕事となってしまう。そこから二十五キロメートル程度なら四十分ぐらいで行け、午前中のみの作業も可能だらうと考えた次第である。

事実、落札購入した土地に、昨年、園地の整備（花と野菜作り）のためにすでに六十回以上出掛けたが、少しも行き来が苦痛ではなかつた。

本場の市民農園——「クライングガルテン」(Kleingarten・小さな庭)は、

住宅地からそう離れてはいないとこにある一区画、三百～五百平米の広さのもので、そこに「ラウブ」(Laube..小屋)を建て、そこで休息したり、場合によつては寝泊りしたりするそ�である。日本の「クライングガルテン」が農村部にあるのとは異なつてゐるようである。

田舎(いなか)

田舎の風情や人情は恋しいが、老後の生活を考えると、一度享受してしまつた都會の便利さは手放せない。このアンビバレンス(ambivalence)を満たそうとする、都會の自宅から近いところで「擬似田舎暮らし」を実現するしかない。その場所としては都市との近接性は必要条件となつてくる。

まだ着工してはいないが、すでに「ラウブ」(Laube..小屋)の構想もほぼ固まり、建築の確認申請を出す段階にきている。建設と同時進行の形で、これから月一回のペースで、その経過を報告したいと思う。それが十回程度に達したところで、「ラウブ」(Laubは完成し、そこで「擬似田舎暮らし」も始まつてゐる予定である。

これから始める物語を貫くテーマを「スマールライフ」にしようと思う

が、その前提の田舎と都會の、それぞれの良さを享受したいというアンビバレンスな欲求を実現できるのは地方都市、中小都市でなければ不可能なことなのかも知れない。

購入してからすでに二年あまりが経つた。日当たりや風の流れ、温度の変化、空気の湿り具合、そういうことも分かつてきた。